

DEATH NOTE—next Level—

内海鳥

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人間界に落とされた6冊のデスノート。同じ目的を持つ6人の死神。そして新たなキラ、Lになろうとする者、キラを追う者、キラを殺そうとする者、ノートを隠そうとする者、ノートを蒐集しようとする者。夜神月によって創られた世界で、彼らは踊る。

目次

プロローグ	1
初頁 side Newkay	3
第二頁 side Gd	12
第三頁 side Wons	18
第四頁 side Chieko	26
第五頁 side Seahell	31
第六頁 side Gd	35
第七頁 side Wons	41
第八頁 side Hiew	47

プロローグ

プロローグ

キラが世界から消えて、ちょうど7年が経った。
キラ。

犯罪者を筆頭に社会的な悪人を裁いていった、新世界の神。

本来法で裁かれるべき者たちを己の裁量ひとつで殺した、大量殺人者。

デスノートと呼ばれる死神のノートを用いて、他者の名をそこに書く事で心臓麻痺などの死を振り撒いた人間。

夜神月。

彼は世界を変えた。

人間の世界だけではない。

死神の世界すらも。

7年の間で何冊ものノートが死神界から人間界へと落とされ、人々の手を渡り、誰かを死なせた。その多くは、只人には過ぎたる力に呑み込まれ、翻弄され、押し潰されていった。

しかし極稀に、ノートを使い己の望みを果たさんとする者たちもいた。だがそれは泡沫の夢と終わる。

Lと呼ばれる男によって。

L。

世界中の警察を動かすことができると言われていて、唯一の男。

世界最高の探偵。

今のLは3代目だ。

初代はキラ夜神月に敗れ、2代目にはキラが成り代わった。

そして夜神月がキラであると明かし、その死を見届けキラの存在に終止符を打ったLの後継者、ネイト・リバー——通称ニアが3代目を襲名した。

7年。

幾人もの死神が人間界にノートを落とした。その裏では、死神界の混乱があった。

人間界に落とすノートを確認する為に死神大王を欺いたり、他の死神からデスノートを盗む者が現れ始めたのだ。

腐敗し墮落していた死神界で、ノートを盗まれ人間の寿命を得られず死んでいく死神が増え始める。本来死神の死などそうそうあるものではなかった。

何故死神が存在しているのかはわからない。

しかしおいそれと死に絶えて良いものでもない。

そう考えた6人の死神は、人間界からデスノートがなくなった時点でそれぞれノートを落とした。

人間界で機能できるデスノートは6冊まで。それ以降人間界に落ちたノートは効力を発揮しなくなる。つまり、これ以上の死神界から人間界へのノート流出を止めようという事だ。

人間界でのデスノート保全。

人間界でどうノートが使われても構わない。とにかく人間界でノートが消滅しないようにする。

それが6人の死神、チコ、ヒウ、フランス、セーヘル、グド、ニユケイの共通の目的だ。

6人は各々、その目的の為に最も適格だと見込んだ人間の下にノートを落とした。

地上に舞い降りた6冊のデスノート。

ノートを手にした6人のノート所有者。

ノートを人間に守らせる6人の死神。

ある者は新たなキラとなり。

ある者はしになろうとし。

ある者はキラを捕らえようとし。

ある者はキラの命を狙い。

ある者はノートを隠そうとし。

ある者はノートを蒐集しようとする。

それぞれの目的と意志が交錯するゲームが始まった。

姫蔵秋乃。18歳、高校3年生。身長155センチ。髪型は長めのボブカット。

秋乃の自宅の浴室でその死神——ニユケイは言った。

〈ずつと見てたよ、姫蔵秋乃……〉

来ているジャージの袖と裾を捲って作業していた秋乃は、死神を凝視した。これでも人並みに自分の顔は鏡で見てきたのだ。自分がどんな目で死神を見ているか、秋乃にはわかつている。

失望の色が浮かんだ目だ。

——……この死神、いじめられっ子だな。

〈……心の中で壮絶な中傷をされた事くらい、ボクでもわかるよ〉

「……そう」

秋乃は手元に視線を落とし、死神が現れるまで取り組んでいた作業を再開した。

〈手伝おうか……?〉

「いい」

秋乃は素っ気なく言う。

ただでさえ死神なんていうシニールな存在が出てきた事に辟易しているというのに、さらにその死神に犬の糞で汚れた制服を洗わせるなんてシニールな真似はさせられないからだ。

自宅の風呂場で、秋乃はお湯と石鹸で制服を洗っている。

ご丁寧に水に浸けて柔らかくなった犬の糞を投げつけたのは、いつもの連中だった。学校の同じクラスで、声がデカい、品のない連中。教師から気に入られていて、そこそこの顔と成績が良くて、社交的。だから無口で目立たない女生徒を迫害しても、周りには目を瞑る。それには、卒業間近だからというのもあるだろう。

時期は1月下旬。センター試験を終え東京の国公立大の入試を控えた秋乃は、推薦で関西の有名私立大学に進学を決めたその女生徒から目の敵にされている。単に秋乃が気に入らないのか、入試に失敗させたいのか、はたまた高校生活でやり残した「いじめ」という行為を

体験してみたいからなのかはわからないが、傍迷惑な話だ。

へけど、キミは勉強しなきゃいけないんじゃない？……？」

「……………」

絶句しながら、秋乃は手を動かし続けた。

まさか、死神に受験勉強の心配をされるとは。

「……………」

秋乃は言ってみることにした。

「貴方が死神だったのは本当だとして、それって私の頭の中の存在？

それとも一応第三者でもわかるように存在してるの？」

「死神だっていうのは信じるの……？」

「ご丁寧に壁抜けまでされたんだから、一応信じるよ。もしかしたらホログラムとかかもしれないとも思うけど、生憎今私、軽く自暴自棄だから。茶番だとしても付き合っただけ」

秋乃が言うと、ニユケイは人間でいうところの目のような部位を細めた。喜びを表しているのだろうか。

ニユケイは、およそ1メートルと80センチほどの体躯で、灰色のボロ布を幾重にも身体に巻きつけているミイラのような姿をしている。その隙間から、身長より長い腕が1本飛び出ている。布の隙間から、潰れた目らしきものが2つ覗いている。

「——それで」

秋乃は泡だらけの手で、開け放した風呂場のドアの向こう、脱衣場の床に放置してある1冊の黒いノートを指差した。

「あれ、何？」

風呂場で制服を洗っていたところ、突如頭にあの黒いノートが降ってきたのだ。まさか家にまで学校の連中がやって来たのかと心底反吐が出そうな心地がしたので、ノートに続いて現れたニユケイに八つ当たり気味にノートを投げ返して叩きつけ、ひとまず濡れない場所に置いておいたのだ。そして先ほどの、ニユケイのストーキング自白へと繋がる訳だ。

「あれは、デスノート……」

「デスノート？」

〈名前を書かれた人間は死ぬ、人間界に落とされた6冊目の死のノートだよ……〉

「そんな物騒な物を私の脳天に落としたのは、どうして？」

〈……保管して欲しくて〉

「クラスの思春期男子みたいなのを言わないでよ……死のノートをエロ本感覚で押しつけられる身にもなって」

〈エロ本じゃ人は死なないでしょ……〉

「エロ本がどういふものかわかるくらいに私や人間のことを観察してたのに、社会的な死についてはわかんないんだね。死ぬほど恥ずかしい思いをして、それでも死ねないのって、なかなかの苦痛だよ」

〈何で女子高生にエロ本について説教されてるんだ、ボクは……？〉

「まあ、大人になればみんな『あんな時期もあったなあ』って悟るんだろうけど」

〈キミ、歳いくつ……？〉

「とにかく」

秋乃は話を戻した。

「厄介事を持ち込まないで。私にメリットないでしょ」

〈……あるよ〉

ニユケイはそつと言った。

声音は今までとまったく変わらない。おそらくその声がこれまでと違って聞こえたのは、秋乃の方に原因がある。

心が、揺れたからだ。

〈メリットなら、ある……〉

「……どんな？」

〈……キミを苛める奴らを殺せる〉

「……」

秋乃の口から出たのは、ただのため息だった。
呆れた。

——もつとマシな救いを一瞬でも期待した、私が馬鹿だった。

〈……え、何でそんなリアクション？〉

「私を苛める奴らが死んだら、私が疑われるでしょ。そんな——」

一通り手洗いの済んだ制服を絞り、秋乃は言った。

「——そんな、出来損ないのキラみたいな真似、私はしないよ」

秋乃の言葉に、ニユケイは息を呑んだ。

——一々わかりやすい死神だな……演技だとしても、下手クソというか何と言うか……。

〈どうして、キラって……？〉

「キラを知ってる人間なら、名前を書いて人を殺せるノートなんて聞いたらすぐ思い至るよ。そんな一見足のつかなさそうなシロモノがあれば、世直しを考えるお子様が発生してもおかしくないから」

〈……〉

「結局どんなポカやらかしたのかは触り程度しかわからないけど、一応あのLとかいう探偵が勝ったってところ？」

7年前まで世界を震撼させていたキラによる犯罪者の大量粛清の記憶は、秋乃にとってもまだまだ鮮やかだ。未だに特番ではキラの是非を問う討論番組が年に1、2回は設けられているし、生討論番組などでもちよくちよく言及する人はいる。ネット上でなら年中揉めている。

〈キ、キミ……〉

「何？」

〈まさかキラの正体とかは……？〉

「知ってる訳ないでしょ。ニュースでやってる内容くらいしか知らないよ。本当にキラが死んだのかどうかさえ、私は知らない。所詮は報道されてる内容にしか触れられないし、もしかしたら私が見たあの映像だってヤラセかもしれないし」

全国同時中継と偽りスケープゴートを使ってキラの所在を日本の関東にまで絞り込んだ、あの劇的な一幕には秋乃でも心が震えた。

しかし、秋乃にとってはどれも画面の向こう側の出来事だった。秋乃は当事者でなければ、傍観者にすらなり切れなかった存在だ。

「ニユケイ、だっけ」

〈え……？ う、うん……〉

「しばらくここに入って来ないで」

へど、どうして……？」

「どうしても何も、これからシャワー浴びるから。人外相手でも肌を晒せるほど、羞恥心は欠落してないの。ベランダでも待ってて」

秋乃はハンガーに制服のブレザーとスカートを引っ掛け、捲つていたジャージの袖と裾を直してから脱ぎ始めた。ニユケイは慌てて壁をすり抜け、家の外へと出て行った。

洗濯籠にジャージを投げ入れようとして、秋乃は床に放置してあったノートに目を留めた。そしてそれを手に取り、洗濯籠に入れ、上から服と下着を被せた。

蛇口を捻り、お湯を頭から被る。

秋乃の頭の中では、様々な情報がグルグルと回っていた。

名前を書けば、対象を心臓麻痺で殺す事のできるノート。もしあの死神同様にノートも本物ならば、世界を震撼させたキラは別のノートか、それと同種の力を持つていたと考えられる。そしてここしばらくは目立ったキラの活動が見られないが、おそらく最初のキラは探偵しか警察に捕まったか、裁きを行えない状態にあるのだろう。

ここ最近でも、キラと思われる犯罪者裁きは稀に報道されている。しかし初期に比べて散発的で、犯罪者以外の者を心臓麻痺で殺したりと一貫性がない。

ニユケイが言っていた「6冊目のノート」という言葉や、かつて報道された第2のキラの存在から察するに、初代とは別のノート所有者がキラを装ってノートを使っていたのだろう。

そしてその内の1冊が、今秋乃の手の届くところにある。

「……………」

どれくらいの間そうしていただろう。

目を閉じて思考に没頭していた秋乃は、やおら蛇口を捻り、両手で頬を叩いた。パアンツ！ と景気の良い音が浴室に響く。

それから髪や身体を洗い、浴室を出て身支度を整えた秋乃はリビングに向かった。

現在秋乃は、一人暮らしをしている。2カ月前に父が事故で他界し、父と2人で暮らしていたマンションの一室でそのまま暮らしてい

るが、それも東京の大学に合格するまでの話だ。東京には祖母が住んでおり、そこに同居させてもらえる手筈になっている。

母は、秋乃が物心つく前に死んでいる。

「——ニユケイ」

少し大きめに声を張り上げると、ニユケイはカーテンを閉めた窓の外から入ってきた。それを見て、やはり死神は本物だと確信する。

「いくつか、話を聞かせて」

〈構わないけど……〉

「これが6冊目のノートだつて話は聞いたけど、何でこんなものを6冊も？」

〈デスノートは、人間界には6冊までしか存在できないから……7冊目以降は、落とされても使えなくなつて……だから、6冊人間界に存在させておく事でこれ以上死神界から人間界にノートが流出しないようにつて、ボクらは決めたんだ……〉

「ボクら？」

〈他の5人の死神……それぞれ、ノートが人間界でこれ以上消滅しないように手を打つて……〉

「つまり、貴方はこのノートを消滅させない為に私を選んだつてこと？」

〈そう……〉

「じゃあ他の5人も、他の人間にノートを託したの？」

〈多分、みんな渡し終えてる頃だと思う……ボクは時間がかかったから……〉

「女子高生をストーキングして、ね」

〈す、ストーキングじゃない……!〉

「私がどう思うかだよ」

〈……〉

「それにしても、どうして最初から1人の人間にノートを固めないの？ そつちの方が良くない？」

〈それは、最終的な目的が同じでも手段が違って……保管する為に能力がある人間を選ぶ基準とか……他のノートを自力で集められる人

間に預ける死神や、どんな方法を使ってもノートを回収させようとする死神がいたりして……」

いまひとつ要領を得ないが、死神界も一枚岩ではないらしい。

「他にも掟があつて、自分が関わってないノートについて人間に漏らしてはいけないとか……」

「ふうん……けど、他の所有者はノートを回収しようとするかもしれないでしょ？ 私のノート狙われない？ というか、私の命も狙われるんじゃない？ どうしてくれるの？ 貴方、私を途轍もない面倒に巻き込んでない？」

「……申し訳ありません」

想像以上にすんなり謝られてしまった。

こうも素直だと、秋乃も口では責めにくい。秋乃は、いつの間にか畳に正座していたニユケイから、テーブルの上に置いたノートに目を移した。

名前を書かれた人間は40秒後に心臓麻痺で死ぬ。さらに、心臓麻痺以外の死因を書けば死の直前の行動まで操れるのだとか。

上手く使えば、ごく当たり前の死を装って顔と名前を知る人間ならばある程度自在に殺せるという訳だ。

「……それで、私を選んだ理由って？」

↑ ↓

「どうせノートを使わせてその罪悪感から隠匿させる為に、手っ取り早くノートを使ってくれそうないじめの被害者らしき女の子に声を掛けてみた、みたいな理由なんだろうけど、他にもあるなら聞いてあげる。他には？」

「………(ぎ)いません」

申し訳なさそうに説明しようとして秋乃に遮られたニユケイは、ますます申し訳なさそうに身を縮こまらせた。

この様子から察するに、共に降りてきた5人の死神には半ば引きずられるようにして加担させられたのだろう。

心底哀れな死神だ。口を開けばこんな居丈高ないじめの被害者を引いてしまったとは、秋乃の所為ではあるが同情に近い感情を抱いて

しまう。

「正直言つて、すぐにも焼いて捨ててやりたいところなんだけど……」

〈ど、どうして……？ あの人間のメスたちを、殺したくないの？〉

「殺したつて、ねえ？」

秋乃は肩を竦めた。

「それ、犯罪だから」

〈けど、ノートに名前を書いただけじゃ……〉

「それでキラは犯罪者扱いされたんだよ？ しとか警察がノートの死亡事件を捜査し始めて、他の所有者の殺人からとぼつちりで私に目をつけたらどうしてくれるの？」

〈それは……〉

「しかも、他にあと5人もこのノートを狙う奴らがいて、そいつらには死神が加担してるんだよね？ ノートを1人の下に集める為に死神が所有者に協力したら、私が所有者だってバレて、最悪殺されるじゃない」

〈……返す言葉もございません〉

「ノートの所有権を手放す手もあるけど、それじゃ管理面では杜撰になるし」

〈……え？〉

目を伏せていたニユケイは、おずおずと顔を上げた。

〈か、管理してくれるの……？〉

「貴方が取引に応じてくれるなら、一考してあげる」

〈取引……？〉

「ノートとか死神の掟について質問に答えて欲しいの」

〈どうしてそんな……〉

「手続き的な、偽善だよ。最初は貴方に名前を書いてもらう事も考えたけど、色々と判定に引っかかって貴方に死なれても寝覚めが悪いし。可能なら、私がギリギリ殺人にならない形でノートを使うだけだよ」

〈ギリギリ……殺人にならない……？〉

「死神は人間に、他人の寿命や本名を教えるはくれないんだよね？」

〈そう……知りたいたら、眼の取引をもらう事になる……〉

「じゃあ、見た物を教えたり、物を盗んで来るのは？」

〈それってつまり、顔写真や名前を書かれた紙を盗むってこと……？〉

「そう。私が自分の目で知る為の手助けは、できる？」

〈それなら、多少は……構わない……〉

「なるほどね。じゃあ次に、間接的な死についてだけど、例えば電車を運転中の運転手の名前を書いた場合、そのまま電車が止まらず脱線して多数の死者が出る、って風にはならない？」

〈うん……電車を降りてから死ぬか、停車中に死ぬとか……〉

「最後にもう一つ。デスノートでは、寿命は伸ばせないのね？　つま

り、明日死ぬ人が明後日死ぬように書いても、明日死ぬ？」

〈そうなる……〉

「……わかった。ありがとう」

これで、自分への言い訳の余地は無くなった。

当初秋乃が考えていたのは、寿命が間近に迫った人間をデスノートの力で延命させつつ、その死に方を利用してもらうというものだった。これなら少しは罪悪感も紛れるのかと思っただが、どうやら救いは無いらしい。

秋乃は呼吸を整えた。

覚悟を決める必要がある。

そして、すべてを永劫に渡って隠し通す決意も。

秋乃はデスノートを開き、手頃なページを千切った。使うのであれば、その痕跡は抹消せねばならない。数十人、数百人の名前を書くなから一々こんな真似をするのも面倒かもしれないが、秋乃はそう何度もこのノートを使うつもりはない。それでもしなければ延々とこの殺人ノートに囚われ、やがては身を滅ぼす。そうでなくとも、これからの一步は破滅に近づくものなのだから。

それでも。

それでも、秋乃は選ぶ。

今終わるよりは、マシだからだ。

第二頁―side Gd―

瑠璃原啓（偽名）。36歳。警察庁キラ対策室室長。白髪交じりの短髪。身長176センチ。

1月5日。

「――6冊のデスノート……正気ですか？ 本当に、そんな事を？」

瑠璃原は、マンション自室のリクライニングチェアの柔らかな背もたれに体重を預けながら言った。

ギョツと目を閉じながら足をテーブルに載せ、伸びをする。

ただでさえ量が読めず勤務過多の恐れがある職務なのに、想像する限り最悪の事態となってしまうた。

〈事実だ。ケイ〉

傍らに立つ死神、グドは頷いた。

「……悪夢だ」

肘掛けの外側にだらりと腕を投げ出しながら、瑠璃原は呻いた。

ケイ。瑠璃原啓。それが、キラ対策室室長である彼の名だ。

キラ対策というのは対外への名目に他ならない。その実態は「デスノートによる殺人事件捜査本部」だ。キラ――夜神月の死後も散発するデスノート絡みの事件を、しと協力して解決してきた。瑠璃原が配属されてから7年、焼却処分したノートは既に3冊にも昇る。そしてその7年間で実績と能力を買われてしまい、瑠璃原はキラ対策室室長となってしまうた。

「ノートが、他に5冊……？ 誰かが僕の本名をノートに書いて、過労死とか書いたんじゃ……」

〈死ぬる分、その方がある意味幸せかもしれない〉

グドは身も蓋もなく言い放った

グドの体躯はおよそ3メートルはあるだろうか。黒い体に、僧侶の袈裟のような黒い衣を纏っている。そして頭部からは不揃いな長さの角が5本生えている。死神というより、異形の鬼に近い。

キラ対策室室長という超過勤務コースにぶち込まれた瑠璃原には、現在このグドが取り憑いている。

7年前、当時人間界に存在していた2冊のノートはニアの手によって消滅した。それ以来捜査側はデスノートを所有していなかったのだが、ここに来て事情が一変した。

瑠璃原の下にデスノートが落とされたのだ。

運命の悪戯などではない。

意思ある者による悪意の産物だ。

瑠璃原にとっては悪意としか言い様がない。

自宅に帰った瑠璃原が、気づかぬ内に死神の手で鞆に滑り込まされていたノートを触った時にはもう遅かった。瑠璃原の前に姿を現したグドは瑠璃原に告げたのだ。

6冊のデスノートを手中に収めよ、と。

深い絶望に囚われながらお気に入りの椅子に沈み込んでいた瑠璃原は、気怠げにノートの表紙を捲り、そこに記載されたルールを読んだ。そこに書いてあるのは、キラ対策室で引き継ぎされてきたデスノートの情報と同じものが書かれている。

「……これ、貴方がわざわざ書いたんですか？」

〈然り〉

「それはまた、ご苦勞様です」

デスノートのルールはすべて日本語表記だった。

過去のノートは英語表記だったと記憶している瑠璃原は、グドに聞いた。

「しかし、何故日本語で？」

〈日本に落とすのならば、日本語が良いだろう〉

「……もしかして、最初から僕に渡すつもりで？」

〈うむ。日本でノートを搜索する者が日本人故、日本語にした〉

「そんな気遣いをするくらいなら、他の人に渡してくれたらいいのに……」

肝心の迷惑に関して、まったくと言っていいほどフォローされていない。

——まさかこの死神、天然……？

「……」に渡すとは考えなかったんですか？」

——もしかして、死神でもLの正体はわからないのか？

〈その者の事も死神界から見ていたが、ノートを焼却する可能性があった〉

「どうやらLの身元は確認済みらしい。しかも、過去にノートを処分していた事まで承知のようだ。」

「人間界でノートを封印する為だと説明すれば、協力してくれると思いますよ」

〈その交渉も含め、ケイに任せるのが最善だと判断した。ケイならば、問答無用で燃やすような真似などしない筈だと〉

実際に死神から説明を受けるまで瑠璃原は問答無用でノートを処分するような真似はせず、グドの言う通りになってしまっているの、瑠璃原からはこれ以上何も言えない。

Lが同じ事リアクションを取るとしても、グドからしてみれば瑠璃原の方がより確実に話を聞いてくれると判断したのだろう。性格はある程度観察されているようだ。

「……まあ、人間界にあるノートの総数を把握できた上、その内の1冊を既に入手できたのは大きいですが」

——これ、部下にはどう説明しようか……にしても、グドを含め新たに6人の死神が人間界に降りたということは、完全に盤面はリセットさせていた……つまり、一からニューゲームつて事ですよ。いずれにせよ過労死待ったなしか……。

思考を巡らせながら、瑠璃原はそれを悟らせないよう何食わぬ顔のままグドに聞いた。

「貴方たち死神は少なくとも『ノートを消滅させず人間界に残す』為に降りて来たんですよ？」

〈然り〉

「なら、他の所有者がキラの真似事をしない限り、キラ対策室の仕事は増えませんか」

〈本気でそうなるか？〉

「貴方の目から見て、そういう人間を選びそうな死神はいましたか？」

瑠璃原はグドを見た。

グドは即答しない。その一瞬の隙で、瑠璃原は説得の続行を決断した。

「他の死神のノートについて口外するのは掟によって禁止されているらしいですが、性格についてならば言えませんか？ 貴方の、個人的な所見を聞きたいんです」

〈……1人、いる。多くて2人だ〉

「そうですか、ではその死神の人を見る目が確かな事を祈るだけです。ね。死神に祈る、というのはなかなか妙な気分ですが」

〈……奇妙だな、ケイは〉

「奇妙？」

〈ノートを回収しなくていい可能性から考えると、思わなかった〉

「使わない拳銃を隠されていても、使われなければ問題ありませんよ。その拳銃が他者の手に渡るのであれば防止はしますが、そうならない人間の手にあるのなら優先順位は低くして構いません。無論、回収できらならしておきますが」

〈こちらからも尋ねて良いか〉

「どうぞ」

〈ノートを搜索する過程で自分でノートを使う必要があれば、ケイはどうする？〉

「どうしましょうか」

本気で、心底、瑠璃原は迷った。

「ノートを使わなければいけない状況といっても、色々あるでしょうからね……いずれにせよ、殺す事を目的に使う可能性は否定しておきます」

使わない、とは言わない。

〈ふむ……では、キラをどう思う？〉

「殺人者ですよ」

〈悪人を裁いていても、か？〉

グドが言っているのは、今なお残るキラ賛美の世論にも通ずるものだろう。

社会における悪人を問答無用で裁く。しかもキラの裁きには、ある

程度人道的な情状酌量があったとも言われている。しまいにはキラを認める国家まで出てくる始末だった。

「ええ、殺人者です。キラを讃える人たちがいるのも確かですし、彼らの個人的な思想を否定するつもりはありません。けれど先人たちが長い年月をかけ、多くの犠牲を出し、結果として今の法治国家の秩序が成り立ち、我々は守られています。だから我々も法や秩序を守るべきですし、そこに不備があったとて、蔑ろにしても良い理由にはなりません」

これは瑠璃原の、嘘偽りない本心だ。

「キラのような人、キラのような考え方が生まれるのはある意味健全だったと思いますよ。そこにデスノートという要因が加わったというだけで、良心ある人たちの中にもそういう思想はあったでしょう。それでも——それだからこそ——それを挫く事もまた、我々に課せられた使命だと思っています」

〈……なるほど、敬服した〉

「ケイだけに」

〈……………〉

「すみません、しみつたれた空気は苦手で」

しみじみグドが言葉を漏らしたせいで、咄嗟に親父ギャグ紛いのボケをかましてしまった。

瑠璃原はポリポリと頭を掻き、グドに言った。

「とにかく、犠牲者を出しうるノートは極力早く回収できるよう手は打ちますよ。しやキラ対策室にこのノートの事を明かすかは、それに合わせて考えます」

〈先にノートがあると知られたら、どうする〉

責められるのではないかとグドは言ったが、瑠璃原はしれつと答えた。

「その時は、アラフォー男の土下座がどんな効果を発揮するか実験しましょう」

〈……………〉

「みんな良い人ですから、誠意を込めて謝ればきつとわかってくれま

すよ」

そういう問題ではないと言おうとしたらしいグドは、口を噤んだきりそっぽを向いた。

瑠璃原なら本当ににやりかねないと、そして周りを封殺するだろうと思いついたらしい。

——察しの良い協力者で助かった。

瑠璃原は心からの微笑みを死神に向けた。

性別、男。年齢、不詳。身長164センチ。ブロンドの髪。ヴァイオレットの瞳。

2016年12月14日。北欧。

あどけない顔立ちの彼は、部屋でインターネットを見ていた。

検索内容は、とある探偵について。

彼は、その探偵の事を深く知りたいたいと思っている訳ではなかった。知りたいのはむしろ、表面的な部分だ。あらゆる側面から表層を知り、自分の表面をそれで飾りたいと思っていた。

L。

世界の警察を動かす事のできる探偵。

誰も顔や本名を知らない。

そんな存在になれる事を、彼は望んでいた。渴望と言っても良い。

正直に言えば、探偵でなくても良かった。警察など動かせなくても構わない。欲しいのは誰からも認められる仮面であり、称号や肩書きそのものではなかった。

誰かに、本名以外の名で呼ばれたい。そしてそういう存在として成立したい。

詰まるところ彼は、自分以外の誰かになりたかった。

そしてちょうどいいと思ったのが、Lという存在だった。

世界にLの存在が公になった事件に、キラ事件があった。インターネットを用いれば、極東で起きた不可解な大量殺人事件くらい簡単にアクセスできる。それによってLを知った彼は、キラよりもLの方へのめり込んでいった。

Lになりたい。

Lのようになりたい。

Lのような存在だと見做されたい。

どんな分野でも構わない。

どんな程度でも構わない。

自分を自分だと主張できる、他の誰も自分に到達できない、認めら

れた仮面が欲しい！

彼の存在は誰にも知られていない。

実の両親ですらもう何年も彼の顔を碌に見ていない。友人なんてそもそもいない。

それでも外界に触れていた。コミュニケーションを取っていた。オンラインという場で、適当な仮面を被る事はできていた。

様々な情報を得ていた。

そんな彼の背後に、何か紙のような物が落ちる音がした。

ヘッドホンを着けてしに關する動画を観ていた彼は、最初は空耳かと思った。しかしふと振り返り、床にある白いノートのような物に気づく。

訝しんだ彼はヘッドホンを取り、その存在について思索する。

自室の入口は常に視界に入るようにしている。部屋は薄暗いので、ドアが開けば外の灯りに気がつくはずだ。カーテンを閉めてある窓も同様。つまり、他者が部屋に入れば彼が気づくはずだ。そして整頓してある部屋に、自分が知らない物があるというのはおかしい。

彼は天井を見た。屋根裏に仕舞われていた物が落ちてきた可能性を考えたのだが、しかし屋根に穴などない。

あらゆる可能性を模索し尽くし、彼はあっさりと諦めた。

自分が全力を以って思考し、それでも正体やカラクリが掴めないのだ。自分ではどうしようもない存在なのだろう。

ある種自暴自棄とすら言えるほどに自分の負けを認め、彼はそのノートを拾い上げた。その瞬間、今まで誰もいなかった目の前の空間に他者の存在を感じた。

「!?!」

彼は声にならない声を上げて大きく仰け反り、床に尻餅をついた。

へはじめまして……私はフランス。死神だ

白と黒の外套のようなものを被り全身を隠した、身長2メートルを優に超えるそれは名乗った。フードで顔が隠れており、その風貌を窺う事はできない。

「死神……!?!」

彼は動悸が治まるのを待って、ゆっくりと起き上がった。

「そうか、死神……」

〈ほう……もう驚いていないと見える〉

「ん、うん……というか、少し落ち込んでる」

彼が直接誰かと対面して会話するのは、実に8年振りの出来事だった。独り言が多いタイプなので、声を出す事自体は久し振りではない。

それについて何か思う以上に、彼は驚きと喜び、そして挫折を感じていた。

〈落ち込む？〉

「うん——」

彼はフランスを見上げて言った。

「——死神の存在を考慮できなかったから」

〈……………〉

「物理的なトリックだったら見破れないのはオレの力不足って認められるんだけど……こっち方向の思考を現実を持ち込める柔軟さくらい持ってないと、しみたいにはなれないかなって」

〈ほう、珍しい人間だ。死神相手にそんな感想を持てる人間は、多分そういない。見込み通りだ〉

「そうかな」

心底興味なさそうに、彼は呟いた。

実際に、興味はなかった。

しならこれくらい読めたかなと、それだけを気にしていた。

「このノート……フランスが落としたの？」

早くも初対面の死神を呼び捨てにしながら、フランクに彼は聞いた。

〈そうだ〉

「何でわざわざオレの部屋に入って、こんな真似を？」

〈お前にそのノートを託したいと思ったからだ〉

「？」

フランスは、人間界に落とされた——或いは落とされる事になる——

6冊のノートについて、そして自分たちの目的について話した。

「——だから、お前には6冊のノートをすべて回収するか……もしくは所在を突き止めてもらいたい」

「ノート探しゲームって事か……面白いけど、どうしてプレイヤーにオレを選んだの?」

それこそ、と彼は思う。

Lにでも頼めば適任ではないか、と。

「あ、もしかして死神でもLの正体ってわからないの? だとしたら、やっぱLってすごい!」

「Lに託す事も考えないではなかったが……」

フランスはやおら腕を上げた。外套の隙間から出てきた腕は、まるで黒い骨のように細く、長く、指は鋭利だった。

6本ある指の内の1本で、フランスはパソコンの画面に映るLのロゴを指差した。

「お前が、あんな風になりたいと思っている事を知ったからだ」

「Lみたいにな?」

「かつてノートを使って犯罪者を裁いていたキラを、Lは倒した」

「そう、だろうね。キラはここしばらく音沙汰がなかったし、最近のは全部パチモノだっていうのはわかるよ。それにしても、Lはこのノートの事を推理して突き止めたのかな」

ただただ募る、Lへの感情。

Lが一気に自分と繋がりを持つ存在に感じられた事への喜び。

自分がLのようになれるかもしれないという可能性と、希望。

彼の身体の中で、それらが臓腑を掻きむしっているかのようだった。

フランスは言った。

「お前は、L以外にLと同様のノート集めができる能力がある者だと思った。Lよりもお前の方が私の性に合っていた。だから選んだ。これでお前は、このゲームにプレイヤーとして参加できる」

「プレイヤーになれるだけの資格があるって死神に見込まれるなんて光栄だね——感謝するよ、フランス」

彼はニヤリと笑った。

「じゃあフランス、早速教えてくれるかな——他の死神たちの性格を」

〈何……？〉

「少なくとも今回のデスノート分配には、君たち死神の作為がある。これまで報道されてきた劣化キラたちのところにデスノートが落とされたのは、故意か偶然かはわからないけどね。しかもその目的は人間界でノートを守る——守らせるコト。それは基本的に、ノートを回収させる事を意味する。なら、死神たちの性格や方針から委託先がわかるかもしれない」

〈ほう……面白い。確かに、死神の性格についてならばいくら喋っても問題ないだろう。主観的だからな〉

「オレの予想では、1冊は警察にあると思うんだ。どこの国の警察かはわからないけど、多分アメリカか日本」

〈ふむ……グド、あるいはヒウならば、公的機関やLといった存在に預けてもおかしくない〉

「グドと、ヒウ……ね」

〈……おい、デスノートにメモを取るな〉

「別にいいじゃないか、名前くらい。どうせ顔がわからないだし、死神はデスノートじゃ死なないし。こんな贅沢なデスノートの使い方をする所有者、絶対他にはいないよー」

〈死ななければいいという問題ではないだろう……そういう事をされる方の気分にもなってみろ〉

「死神にそんな説教されるとはね」

〈……〉

デスノートに名前を書くという、本来なら致死級の呪いを死神相手にしでかす彼の神経に、フランスは絶句した。しかも死神に道徳を説かれた上黙らせられる始末だ。

その奔放さに期待する気持ちもあるのだが。

「他の死神は？」

〈……ああ……セーヘルなら、所有者を使い潰すくらいの事はしそうだ。チコは、いざとなれば自分でノートを回収するくらいの真似をし

かねない。それくらいに、正義感に燃えている」

「死神が正義感に……？ ギャグ？」

「ギャグというより、バグだな」

「何ちよつと上手い事言ってるんだこの死神は……」

「ニユケイは小者……小心……いや、臆病か。事の渦中にはいたがら

ないタイプだ」

「隠れんぼが上手いタイプ？」

「存在を忘れられてみんなに帰られてしまうレベルでな」

「それ、ある意味今回は強敵だね。障害にはならないけど」

「……そういえば、チコは熱心に話を聞いていたな」

「話？ 誰に？」

「リユークという、かつてキラと呼ばれた男に憑いていた死神だ」

彼の瞳に、一際強い光が灯った。

「……キラの話？」

「ああ」

「なるほど……人間界でデスノートといえば、キラだろうね」

キラとデスノートを結びつける事は、彼にとつても容易かった。そ

して、キラと聞けば居てもたつてもいられない。

キラを捕まえるのは、自分がLクラスの存在になる証明としては最

高だ。

「……よし、いずれにせよこうしちやいられない。こんな部屋に閉じ

こもっていても、何もできない」

「随分と簡単に外に出る決心をするな……お前は引きこもりというや

つだと思っていたが」

「別に、外に出たくない訳じゃないからね。とりあえず夜になるのを

待とう。それまでに日本とアメリカのどっちに行くか決めて……あ、

その前に日本語はもうちよつと勉強しておかないと。Lがキラの居

場所を日本に特定してから、もしかしたらLが日本に乗り込んでるか

もしれないと思って日本語はずつと勉強してたんだよね。英語は大

丈夫なんだけど、日本語はちゃんと会話できるかわからないし。ラン

ス、練習相手になつてよ」

マシンガンのように言葉をバラ撒き、彼は言った。

「死神は言語の壁を超えて人間と話せるから、構わないが……それより聞き忘れていた。お前、名前は どうする？」

「名前……ああ、いいねフランス。その質問をしてくれるのは、very goodだよ！」

死神であるフランスには彼の本名が見えているが、それには触れず名前を聞いたのは、彼がLの在り方を信奉していると弁えているからだろう。

彼はしばらく考え、ネットで使っているものとはまったく関係ない名前を考えた。

「そうだな……シンプルでカッコイイ名前がいいな……あとLっぽくて……アルファベットそのままっていうのは狙い過ぎだな……あと本名に似てなくて、けど本名っぽい名前、しかも偽名感がなくて、それでもやっぱり記号っぽい名前……うーん……」

「……」
思考やら願望やらが全部口からダダ漏れているが、彼は外界の事など一切関知せず呟き続ける。

「意味ある英単語っぽいのか……そうだ、漢字もいいなあ……クルだし……そうだ、漢字にあて字みたいなの読み方をつけるのもカッコイイかな……しみたいなロゴだって欲しいし……迷うなあ……」

「……例えば、私の名前を使ってみるとかは、どうだ」
「ヤダ」

「……」
「いや、ダサいとかって意味じゃないよ。単に、他の死神にバレたら嫌だなんてだけ」

「……私は何も言っていないが」

「よし、決めた！」

フランスを無視し、彼は遂に答えを捻り出した。

「ライ！」

「ライ？」

「うん！ オレの名前は、ライだ！ 良いでしょ？ カッコイイで

しよ！」

〈……良いんじゃないか〉

どうせ何を言っても聞きはしないだろうと諦めながら、フランスは相槌を打つ。

「よし、じゃあフランス！　これから日本語の練習だ！　変なところとかあつたら教えて！」

自分の仮面が徐々に出来上がっていくのを感じて喜ぶライはヴァイオレット色の瞳を輝かせ、初めて誰かに向けて日本語で言った。

「ヨロシク、フランス！」

車折蓮二^{くるまぎれんじ}。28歳。警視庁総務部情報管理課勤務。身長171センチ。鋭い双眸と黒縁の眼鏡。

2017年1月12日。警視庁。

車折蓮二は目立って優秀な個人ではない。確かに仕事は正確でそこそ速いが、それは能力というよりも性格に由来するものだ。身体能力も中の上程度。発想が柔軟な訳でもない。規則やルールは遵守するが束縛はされない。正義感も人並み。手先の器用さに関しては、自信があるが、スキルというより知識と経験が他人より多い程度だ。

警視庁総務部情報管理課は、車折にとっては天職とも言えた。警察がより正確に、より多く、より効率良く情報を扱う事ができるようにシステムを点検・構築するのが主な職務だ。

現場で犯人を捕らえたり犯罪を捜査するよりも、そういった仕事の方が性に合っていた。だがそれでも他の職ではなく警察を選んだのは、車折にとって最も社会に貢献できるのが警察官だと思ったからだ。

車折にとって、自身は社会の歯車だった。

昼休みに入り、仕事に一区切りつけて食堂で1人昼食をとっていた車折の向かいに、車折と同期入庁して別部署で勤務している1人の男が座った。

「車折」

「ああ、安田」

カレーうどんの湯気で眼鏡が曇らないよう眼鏡を外していた車折は、声で判断した。

「なあ、月末に合コン企画する事になったんだけど、車折もどうだ？
確かお前、彼女いなかっただろ？」

「月末……どうしようかな」

「嫌なのか？」

「嫌って訳じゃないけど……何人来る？」

「3対3。何、もしかして合コンに嫌な思い出でもあんの？」

「大したものじゃないよ。大学で5対5の合コンに無理矢理引っ張り込まれて、多人数の中で馴染めなかった事があるくらいかな。目立たない俺を数合わせにして、上手く使われたんだ」

「あー、いたいた、そういう奴」

頷きながら、安田は定食の味噌汁を啜った。

「3対3なら、埋もれないし大丈夫だと思うけど？」

「それはわからないけど……どうせ週末はやる事もないし、使われてやろうかな」

「使うも何も、相手に受けが良さそうだからお前を誘うんだぜ？」

「俺は普通だよ」

「普通に真面目な奴って、あまりいないからなあ。真面目になろうとして真面目な奴って、しんどいからさ。あ、ちなみに3人目の男は水野な。もう誘ってある」

「水野も来るのか。なら楽そうだな。いいよ、行く」

水野は車折の大学の後輩で、安田の部下だ。背が高く大柄で、声が低い。人当たりが良く聞き上手なので、車折としても合わせやすい。

「ナイス！ あ、それと相手は妹の友達なんだ。全員社会人だけど」

「警察官が学生に手を出すのも、な」

「色々世知辛い世の中だしな……そういえば——」

安田はさりげなく声を低くした。

「木場さん、今揉めてるらしい」

「揉めてる？」

「持ち込まれた痴漢の担当になったらしくてさ。しかもこれがまた厄介で、ほぼ冤罪だってよ」

「嗚呼……」

慎ましく沈痛な表情を浮かべた安田を見て、車折も似たような心境になる。

「やりにくそうだな……にしても、ほぼ冤罪っていうのは？」

「どうも、被害者の女子高生に見覚えがあるらしいんだよ。何度か痴漢被害で警察に来てるんじゃないかって」

「なるほど、そういう……」

「この手の話はやりにくいにも程がある。男からじゃ『女性専用車両を使うなどの対策をしろ』とかしか言えないし、かと言って女性専用車両自体にも色々意見はあるし。本当に痴漢された可能性も否定はできないが、そう何度も何度も同じ子が痴漢に遭って訴えを起こしている」と疑ってしまう」

安田の話を聞きながら、車折も嘆息する。

こういった日常で頻繁に起こる事件には、やり切れない些細な悪意や疑念が多く付き纏う。

「……何か、変わったよな」

「……ん？」

「いや……大きな犯罪は、そりゃ減ったよ。通り魔だとか、薬物売買だとか、詐欺とか。計画して大きな事件にする人間は確かに減った。けど、こう、隠れてやろうっていう意思が昔にも増して強くなったと思うんだよ」

何故そうなったか、を公の場で口にしない安田はよく弁えている。

キラの裁きによつて一時期は世界、特に日本での犯罪件数は大幅に減った。ニュースで報道されるような犯罪者は片端から心臓麻痺で死んでいき、見せしめとなっていた。未だにキラの強烈なインパクトは世間に残っているが、同時に、キラを直接知らない世代が学生世代に増えてきている。そして、彼らが「キラにさえ裁かれなければいい」という困った考えを持っているような空気を、時折車折は感じるのだ。

「報道されない程度の犯罪とかならいいっていう空気、多分あの頃より強いよな」

「警察よりも先にキラを犯罪に結びつけられる事が増えたっていう感覚は、俺もわかるよ」

警察に捕まる以上にキラに殺されるのが怖い、という感性が芽生えた上でそのキラという蓋がなくなった。

「その分、ネットへの晒しが増えたとも思う」

車折は言った。

こんな悪い奴がいる。そんな書き込みが、今でもキラを信奉する人

間たちが多く集まる掲示板では多く寄せられている。膨大な量の、顔写真や名前といった個人情報が出しているのだ。当然、キラなど関係なく悪用される事例は多くある。

「難しいな……」

そう呟いてから、ハッと安田は顔を上げた。

「いかんいかん！ 暗くなっちまった！ お前と飯を食うとすぐこれだ」

「いや、元はと言えば安田が始めた話じゃないか」

「合コンの席ではやめてくれよ？」

「お前がきつかけさえ与えなければ、俺は自分からこんな話はしない」
それから2人で食事を済ませ、車折はオフィスに戻り、やがてその日の仕事を終えて帰宅した。

アパートの一室に入り、風呂を沸かして夕飯の準備に取り掛かる。その間も頭の中を巡っているのは、キラについてだった。

キラならば、昼に安田と話していたような犯罪に対してどう接するのだろうか。疑わしきは罰するのか、はたまた明らかな悪を裁いて見せしめにする事でそういったものすら抑制しようとするのだろうか。

——キラはどこまで知っていた？

何度も考えてきたその疑問に、今日も車折は思い至る。

かつてキラと直接(?) 対決をしたLを、キラは殺せなかった。リンド・L・テイラーという死刑囚をキラに殺させた直後現れた(?) Lはキラを挑発したが、Lは殺されなかった。そしてLはキラを「所詮はただの人間」と断定するかのようにさらに挑発した。個人情報を特定できていない人間を、キラは殺せない。

では、キラはどこまで犯罪者たちの個人情報にアクセスできていたのだろうか？ 第二のキラ事件では、より多くの犯罪者を報道するようという希望があった。それはつまり、ニュースなどがキラの情報源だったのかもしれない。

——俺なら？

車折はさらに考える。

——俺なら、さらに洗練された裁きができるんじゃないか？

世に報道されていない悪を裁ける位置にいる車折なら、最低でもキラと同程度、もしかするとキラ以上に的確に悪人を裁けるのではないか？

そして車折ならば、キラという前例を教訓に、Lなどのキラを追う存在を最初から想定して動けるのではないか？

リンド・L・テイラーのような人間を殺すという迂闊な真似はせず、徹底して、淡々と、実直に、脇目も振らず、ひたすらに裁きを行えるのではないか？

思考しながら調理の手を止めず、作った料理をリビングのテーブルに運んでテレビを点けた。毎日報道される犯罪のニュースをBGMに、箸を動かす。

キラという存在を知ってしまった事で生まれた、「自分がキラだったら」という思考ルーチンはこうなると止まらない。車折以外にも数多の人間が同じ発想を持つだろう。

キラウィルス、と呼んでもいい。

車折の性格では、どんどん率直に受け止め、考え、答えがない問題ほど泥沼に沈んでしまう。

深く、深く、さらに深く。

車折は沈んでいく。

キラという深淵に吞まれていく。

だが翌日、唐突に車折はその底に辿り着いてしまった。

朝目を覚ました車折は、枕元に置いていた眼鏡を掛けて目を見張った。

床に敷いた布団の傍にあるテーブル。その上には、見覚えのない黒いノートが1冊置かれていた。

車折は、それに触れた。

第五頁―side Seahell―

オリガ・ローゼン。31歳。身長160センチ。国籍、ロシア。
1月28日。アメリカ。

その日は奇しくも、かつてキラがこの世を去ったのと同じ日だった。

それまで世界中で報道されてきた重犯罪者やテロリストが、まったくの同時に心臓麻痺で命を落としたのだ。

死亡した犯罪者の数は、合計で302名。一夜にしてそれだけの悪人が裁かれた。

キラ再臨。

その報せが瞬く間に世界を駆け巡るのは、ひつじよう必定であつた。

「始まった……!!」

ニューヨークのホテルの一室でノートパソコンでニュースを見ていたオリガは、強く拳を握り締めた。

キラによるものと思われる裁きのニュースは、ニューヨーク時間の深夜には既に広まっていた。

へなるほどオ、これが犯罪者を裁くとかいう神気取りの……」

オリガの肩越しに画面を覗き込んでいた死神のセーヘルが呟いた。カラスの頭蓋骨のような頭部と、痩せ細った人間のような身体つきの死神だ。その全身の肌には青いタトゥーのような模様が入っている。

「……取引よ、死神――」

オリガは背後の死神に目もくれず、ニュース画面を睨みつけながら言った。

「死神の眼を、私に寄越しなさい」

へフククク……いきなり飛ばしますねエ。寿命半分、本当にいいのですかア?」

「構わない。キラを穢けがす贖がんさく作は、私の手で殺す。そしてキラに6冊のノートをすべて捧げる……!」

へ過激ですことオ……けれど、こうして悪人を殺す者があるのは元祖

キラもウエルカムではア？」

「私欲の為にキラの名を騙るのも、キラに憧れてキラを目指し模倣するのにも、私にとってはキラを冒瀆する事に変わりないわ。キラが創り上げたこの世界は、キラ1人によって創られたもの。誰かがキラと同じ力を手にしたというだけでキラを継ごうとするなど、キラの功績に染みをつけるだけよ。我々はキラの意志を重んじ、キラが創った世界を享受すればいい……！」

「おお、おう……」

「わかったら、さつさとやってちょうだい」

「まあ、アタシは構いませんがア……」

「セーヘルは手を伸ばし、アリサの眼を死神の眼に替えた。

「具体的に、ノートの回収はどうするおつもりでエ？」

「寿命の見えない人間の名前を片端から書いて、私にノートを渡して死ぬようにする。6冊全部集まったら、最後は私か貴方のノートに私の名前を書くか、賢い人間の名前を書いて、『ノートを永久に見つからないよう隠して死亡』と書くだけ」

「妥当ですねエ」

「オリガはインターネットで飛行機のチケットを手配した。

「日本の東京行き……そういえば、元祖キラは関東にいたんでしたっけエ？」

「そうよ。おそらく他の所有者も一度は東京か日本に足を運ぶはず。こうしてキラ擬^{もど}きが活動すればなおさらだし、しが出てこればもっと都合が良い。しが所有者かどうかはわからないけれど、いずれにせよ私と敵対する直接の理由はないし、いざとなれば眼を持つ私自身を取引材料に使える」

「他の所有者も眼を持っていたらア？」

「早撃ち勝負、といったところね。先に見つけて名前を書いた方が勝つ」

「死神の眼はノートの所有権と共にあるので、所有権を放棄する訳にはいかない。つまり眼を持つ以上、他の所有者の眼で所有者であると知られてしまう危険性がある。」

「キラ擬きが引き籠もりだった場合はア？」

「それこそしと警察の仕事よ。だから私がまず調べるのは、日本の警察——手始めに警視庁。そこに入入りする警察官を張り込んで、所有者を探す。所有者がいれば、キラ擬きかどうか自白させるようにノートに書いてノートを回収するわ」

「警察といっても、人は多いと思いますがア」

「1ヶ月周期で各地の警察から情報提供させれば済む話よ」

警察官の死を操作する事で、キラを捜査する人間の情報を集めて眼で名と寿命を見るということだろう。

「フクククク……この様子だと、決着は思いの外早く着きそうですねエ……」

「……………」

溢れるセーヘルこぼの笑い声を聞きながら、オリガは死神を一瞥した。

この死神がオリガを利用しようとしている事は、3ヶ月前に出会った時からわかっている。しかし、オリガにとってそれ自体は問題ではない。利害は一致しないが、互いが互いを手段として利用できる。だからこそ、こうして行動を共にしている。

オリガはテーブルの上に置かれたノートを見た。

濃い赤色のデスノートは、まだ誰の血も吸ってはいない。

オリガは経済書や普通のノートなどでデスノートを挟み、ブックバンドで縛って旅行鞆に放り込んだ。そしてパソコンとスマートフォンで、閲覧できるキラ事件の速報に次々と目を走らせていく。

『キラ再来』

『裁かれる悪』

『今までと同じキラか否か』

『しはどう動く』

様々な見出しが並ぶ。そのどれもが、オリガの内に点いた怒りの炎の燃料にしかならなかった。

何故誰も怒りの声を上げない？

何故誰も、これがかつてのキラではないとわからない？

こいつはキラを後追いするだけの贗作に過ぎないのに。

キラの栄光に尻を載せているハイエナでしかないのに。

この世界を創ったのは最初のキラだ。

讃えられるべきは最初のキラだけだ。

デスノートで世界を変えようと志し、勇気ある初めの一步を踏み出したキラこそが唯一のキラだ！

新世界を切り拓いたキラこそが絶対のキラだ！

誰が「跡を継ぐ」などと言おうが、それはエゴでしかない――

――そんな思い上がりは、私が許さない！

それから眠りについたオリガは、夢を見た。

自身の過去の追憶。

オリガの信仰が試された、あの瞬間の光景。

夢から醒めたオリガは、夢の内容を思い返して確信する。

やはりあれは、神が、キラが私を試す為に与えた試練なのだ。

1月28日、14時10分。日本。

瑠璃原は内心頭を抱えた。

キラ再来のニュースは当然のように瑠璃原の下にも届き、瑠璃原がキラ捜査及びデスノート争奪戦の最前線に立つ事は確定したからだ。暗号の仕込まれたLからのメールを読み、ただただ瑠璃原は悲嘆に暮れる。

それから瑠璃原はその日の警察署での仕事を終えた。

キラ対策室の仕事は、それから始まる。

警察署内で大っぴらに捜査できないキラ対策室の本部は、とあるビルの隠しフロアにある。会員制のバーやスポーツジム、ネットカフェが入っているビルだ。

20時18分、キラ対策室メンバー12名は本部に全員揃った。警察庁に偽名で入庁しており、家族のいない信頼できるメンバーで構成されている。その中には松田や相沢、摸木といった最初期からキラ捜査に携わっていた者はいない。彼らのようにキラを追う者としての経歴が明らかだと、ノートに操られて情報を漏らしてしまう可能性が極めて高いからだ。

今やキラ対策室は、完全に極秘の存在となっている。これはLと瑠璃原の手腕によるものだ。

「みなさんも既にニュースで知っていると思いますが、キラが現れました」

瑠璃原は言った。

メンバーである暮田^{くれた}、山路^{やまぶき}、村上^{むらかみ}、漆部^{うるしべ}、拝島^{はいじま}、藤野^{ふじの}、鬼頭^{おにがしら}、草津^{くさつ}、光本^{みつもと}、小崎^{おさき}、坂下^{さかした}は各々頷いた。年齢や所属はバラバラだが、キラないしデスノート捜査において信頼できると瑠璃原自ら判断した者を集めてある。

『犯罪者などの悪人を』『心臓麻痺で殺す』という点から、『ノート使い』ではなく正式にキラであるとしてこれから捜査していきます」

ノート使いという呼称を、瑠璃原は頻繁に使う。ノート所有者をキ

ラとそれ以外の者とで差別化する為だ。

「キラによるものと断定されている心臓麻痺は最低でも250件。全員同時に死亡しました。時間は午前0時です」

瑠璃原が言うと、鬼頭が怪訝そうな顔で手を挙げた。年配の男性刑事で、キラ対策室の中でも最古参の熟練捜査官だ。

「午前9時ではなかったか？」

「日本時間ではそうなんです、この場合はグリニッジ標準時間0時とするのが正確だと、私は見えています」

「根拠は？」

「あまりにきっちりしているから、です」

瑠璃原が言うと、11名の部下の内10名は首を傾げた。しかし、山麓だけは納得したように手を叩いた。

「自分の情報を隠す為に、ですか？」

25歳と対策室で最年少だが、その着眼点や発想の柔軟さには特筆すべきものがあり、これまでの捜査にも彼はしばしば転換点をもたらしている。

「その通り」

瑠璃原は微笑んだ。

「裁かれた者たちの国籍はバラバラで、あまり偏りはありません。だからこそ死亡時間に『特徴がない』という特徴をつけていると、私は見えています。筆跡を隠す為に定規を使って字を書くようなものですね」

犯罪者の情報を得た際のタイムラグなどが出ないように、キラはかなり苦心しているようだ。しかも適当な時間ではなくグリニッジ標準時間を指定する辺り、几帳面さすら覚える。

「かなり慎重ですね……」

「はい。ノートに片っ端から名前を書くのではなく、初めから同時に死ぬように設定しています。『名前を書いてみた』のではなく、まずどのようにして裁くかを検討してから実行に移している。そしてキラとしてのインパクトを与える事も考慮しているのは確かですね。200人が同時に心臓麻痺で死ねば、キラの思想に基づいた死だと誰も

が思うでしょう。この方法のさらに有効な点は、他にノート使いやキラを装う人間がいても、差別化しやすい点にあります。裁きのタイミングが読めず、傾向の異なる悪人を裁けば目立ってボロが出る」
「では、これからも同じ殺し方をするんでしょうか？」

女性捜査官の光本が言った。

「断言はできませんね。あくまでデビューの為だけの殺し方という見方もできます。私個人の予想では、おそらくこれからこの形式で裁きが続きますが」

「もしかして、裁く事よりも隠蔽を重視するタイプのキラって事ですか？」

「はい。さらに言えば、これまでの——特に初代キラから学習しているのでしょう。より限定するならば、Lとの対決ですね。居場所をバラさない事になり気を配っている。これからの裁きも、すぐに名前を書くのではなく、どのタイミングで死ぬのが最適かを考えてからそこに合わせて殺すでしょう」

言ってからふと思いつき、瑠璃原は手を叩いて鳴らした。

「——あ、このキラは絶対に犯罪者以外を殺さないでしょう！ 私のクビを賭けてもいいですよ！」

「室長、それわざと言ってるでしょう……」

苦笑しながら山路が言うと、他のメンバーたちもまばらに笑った。

「今までだって何度かそう言って大胆な予想を立てる癖に、ハズレないじゃないですか」

「こいつは対策室がこの形になった時から『辞めたい』『もう嫌だ』ばかり言っていたからな」

鬼頭が言うと、瑠璃原は頭を掻いた。

「室長って言うのが嫌なんですよ……早く、誰か私を使えるところまで昇進してください」

「昇進を決めるの、室長じゃないですか。実質的に上がらない部署なんですから」

「私が決めたら、みなさん怒るでしょう」

「それはそうだ。少なくとも私がいる内は、『逃げるな』と首根っこを

掴んでやる」

鬼頭はそう言い、豪快に笑った。瑠璃原含め、全員もそれに釣られて笑う。

「にしても、犯罪者以外は殺されないというのは何故ですか？」

暮田が言った。彼も初期メンバーの1人だ。

「簡単な事です。これだけ慎重なキラなら、足がつくりリスクを最小にするはず。初代キラにはある種の自己顕示欲が見られましたし、キラであるとアピールしようとする必要があったのは認めますが、今となつてはそんな事をするまでもなく世界はキラに注目しますから」

「厄介ですね……炙り出せるんでしょうか？」

「死の時間を決めてから殺すというスタイルからして、犯罪者の情報をこちらが操作する事で捜査範囲を絞り込むという手段は効果が薄いでしょうね。Lが最初に使ったやり方から対策を練ったのでしよう。その犯罪者を裁いても安全かどうか、徹底的に検討しているはずです。数年分の犯罪者のストックもあるので、しばらくはまとめて犯罪者が裁かれるでしょう」

「このキラについて、Lは？」

『キラは大人になりましたね』という暗号メールが送られてきましたよ。極めて的確な表現だと思います」

それは過去の失敗から学び成長している、というだけではないだろう。裁きにおけるこの辛抱強さは、かつてLがキラを「負けず嫌い」と評していた事からも歴然としている。それなりに歳をとった人間がノートを持っているのかもしれない。

——こんな慎重な子供がいたとしたら、未恐ろしいにも程がありませんね。

瑠璃原は身震いした。

「さて……総括に入ります」

瑠璃原はあくまでも表面的な態度は崩さず言った。

「今回のキラはより慎重に、より周到になっています。それでもその能力は健在、このままでは被害は大きくなる一方でしょう。まず私た

ちは被害者たちの情報を手でできる経路から当たるとします。以上です」

瑠璃原は締め括り、メンバーはそれぞれ解散した。すぐに帰宅する者がいれば、ビルにあるジムでトレーニングしてから帰る者、残って捜査に手をつける者もいる。

瑠璃原は荷物をまとめ、キラ対策室本部を出た。廊下を歩き、エレベーターに乗る。そしてエレベーター内に設置されている瓶からシヨットグラスにバーボンを注ぎ、飲み干す。ティッシュでグラスを拭き、特定の階で降りた。隠しエレベーターは会員制バーの奥にあり、瑠璃原は今日はバーの客を装ってこのビルに来ている。バーから出て来た人間から酒の匂いがしないのは不審に思われるので、こうした仕込みをしている。

対策室への入り方には様々なパターンがあり、その使い方もメンバーによって様々だ。バーから入る者、スポーツジムから入る者、ネットカフェとバーを使い分ける者など様々だ。私的に施設を利用する者もいる。ちなみに、料金は自腹ではなく経費だ。

「ただいま、グド」

帰宅して電気を点けた瑠璃原が言うと、グドが応じた。

「……ケイ、やはり他にどうしようもないか」

「はい、我慢してください」

気が滅入ったように訴えかけてきた死神に、瑠璃原は笑顔で言った。

現在瑠璃原は、ノート的所有権を放棄している。ノートは二つ折りにして縛り、分厚い本のページをくり抜いてその中に収納してある。ちょうど地上にあるデスノートの冊数分をカバーできるシリーズなので、ちょうどいい。そして誰にも所有されていないノートに憑いたグドは、部屋から出ないよう瑠璃原にきつく言われている。

「誰も入って来てませんよね？」

「うむ……しかし死神を軟禁するとは、ケイも相当だな」

「グドがキラ対策室室長を所有者に選ぶなんて安易な真似をするからじゃないですか」

既に何度も繰り返されているやり取りだ。

「キラ対策室室長なんて、ノート所有者でなくとも命を狙われる危険があるんですから。しかも、ノートを使った事のない人間がただ所有権を捨ててもノートに関する記憶は消えないなら、所有権がなくとも僕がノートを隠していると読むノート使いがいてもおかしくない。他の死神にグドの考えを読まれている可能性も十分にある訳ですから。というか、僕が他の所有者ならそこから詰めます」

へしかし、キラ対策室とやらは存在を秘匿しているのであろう？」

「隠してても、バレる時はバレますよ。ただ、デスノート方面からバレないようにするのは僕の責任で、僕にノートを渡したグドの責任にもなりませんから。グドが他の死神に目撃されてアウト、なんて事態は避けねば」

へ……死神に『責任』なんて言えるのもまた剛胆だな」

「まあまあ。その分報酬も弾みますよ」

瑠璃原は提げていた袋から瓶を出した。

「今回はワインです」

〈葡萄酒か〉

「ええ。口に合うと良いんですが」

人間界で、グドは酒にハマっていた。

どハマリである。

種類を問わず、好んで呑んでいる。瑠璃原との晩酌が、軟禁されているグドの唯一の楽しみらしい。

「神の子の血って、死神はオツケーなんですか？」

〈神の子……イエス・キリストか。問題ないであろう〉

「ワインが死神の弱点だったら、それはそれで爆笑ものですよね」

〈時々思うが、ケイの思考は悪魔的だな〉

「そうですか？」

〈イヤらしい、と言うのか〉

「死神に言われるのは、さすがにキツイですね」

他愛のない話をしながら、瑠璃原とグドは2人で酒を酌み交わした。

1月30日。

インターネットで新キラ始動を知り旅支度を大方済ませたライに、フランスが言った。

「――ライ、お前はノートを使わないのか？」

ライはネット通販で買った旅行鞆を閉じ、机の上のノートを手に取って答えた。

「このノートはオレの手元にあるだけで、人間界のノート総数を把握できるっていうアドバンテージになるからね。それにLならきつとノートを使つて人を殺さない。だからノートは使わない」

「Lも必要ならばノートの力を利用する可能性は、考えないのか？」

「考えたけど、そんなLカッコ良くないじゃん！」

「そういう問題、なのか……？ いや、お前にとっては大事なのかもしれないが……」

「それより、Lでも警察と協力してたからあんな凄い仕掛けでLを炙り出したんだよね。てことはやっぱり、オレも警察の人と仲良くなった方が良くかなー」

「ノートの事は話すのか？」

「基本話すつもりだよ。こう、さ。アタツシユケース開いてノート見せて、『私はライ。貴方がたと取引に参りました』とか言ったりしてさ！ カッコイイだろ！」

「知るか」

「あ、でもLっぽくないな。顔を見せない方がLっぽい。警察を誘導してノートを入手させたりする方が良くかな。『これが私の誠意であり、貴方がたへの手向けです』みたいな！」

「待って待って、お前がノートを集めるといふのを忘れていないか？」

「へ？」

きよとんとした目でフランスを見つめ返すライに、フランスはたじろぐ。

〈ま、まさか……〉

「そりや集めるよ？ 集めるけど、最終的に管理するのはオレじゃないかな。くてもいいかなーって。所有権を放棄してノートをちゃんとした人に預けるのを条件にし扱いしてもらうのも、割とアリじゃない？」

〈……まあ、ダメではないが〉

「所有権で思い出した。死神の眼の話なだけどさ。もし眼の取引をした所有者がいたらヤバイよね」

〈そうだな〉

「じゃあ所有権は放棄しておいた方がいいかなー……よし、なら秋葉原に行こう！」

〈文脈が読めないぞ、ライ〉

「ノートの隠し場所を作るんだよ。フランスを見る事ができて、かつノートに直接接触らず持ち運ぶ為のね。ノートに名前を書いた事のない所有者が所有権を放棄しても、ノートに関する記憶は消えないんでしょ？」

ライはノートのページを千切り、そしてノート本体を封筒に入れ、フランスを見て言った。

「それじゃ、フランス。所有権を捨てるよ」

〈わかった〉

一時的にライにはフランスの姿が見えなくなる。しかしノートが封筒に入っている事も、これから目の前にあるノートのページに触れてフランスを再度知覚できるようになる予定も覚えている。ライはその切れ端を手にとった。

「よし、また会えたね、フランス」

再び姿が見えるようになったフランスに微笑み、ライは言った。

「直接接触すると所有権が戻っちゃうから、秋葉原でノートパソコンを改造して封筒ごとノートを仕込むスペースを作る辺りが妥当だよな。その辺の知識も仕入れないと……」

〈……〉

「……」

〈……何だ、こっちを見て〉

何かを期待するような視線をフランスに向けていたライは、大袈裟に肩を竦めて「やれやれ」と首を振った。

「ノートパソコンの中にノートを隠すって洒落に気づいてくれないなんて」

〈……幸せそうな奴だな、お前は〉

「へ？ どこが？」

〈自分の感性を大好きなところが〉

「だって、オレの感性を一番知ってるのはオレだからね。自分で自分を喜ばせる方法を知っておくのは、良い事じゃない？」

〈……なるほど。珍しく共感できる事を言うな〉

「あ、工具も買わないとなー」

〈他人の話を聞かないのは、もう仕方がないか……〉

「フランスは人じゃないし」

〈私以外の人間の言う事も聞かないだろう？〉

「意味のないやり取りを省略してるだけだよ」

ライはノートが入った封筒をリュックサックに入れた。既に日本行きの飛行機のチケットは手配してある。

〈しかし、秋葉原みたいな人の多いところに行くのはそれでもリスクじゃないのか？ 先にここで仕込み場所を作ってから日本に行った方が良さそう？〉

「空港の手荷物検査に不自然なパソコンを持ち込む方がリスクじゃない」

〈……言われてみれば、そうだ〉

「それに、秋葉原見物、一度はしてみたかったんだよ！」

〈お前そっちが本音だろう〉

フランスはため息をついた。

〈早くも目的を見失っていきそうで怖いな……お前に限ってそんな事はないんだろうが〉

「折角だし、メイド喫茶とか行ってみたいんだよね！」

〈本当に自由だな、お前は……〉

死神に呆れられるが、そんなものは意に介さずライはスマートフォ

ンで東京観光の段取りを検討している。あまりにお気楽なその様子に、堪りかねたフランスは口を挟んだ。

「それで、キラの目星はついていいのか？ キラを追う警察やLがデスノートを持ち、死神と行動を共にしていれば、既に捜査は進んでいるかもしれないだろう」

「目星だけならついてるよー」

「……………何？」

あまりに自然に放り投げられたその言葉に、フランスの理解が遅れる。

メイド喫茶や猫カフェのレビューを見ながら、ライは事もなげに言った。

「多分、司法関係者じゃないかな」

「キラが？」

「キラが」

「その根拠は？」

「やけに、というか、妙な自信家だから」

「自信家というのはまだしも、妙というのは？」

「過去のL対策をきっちりして、初代キラと同じ轍を踏まないようにしてる辺りは慎重なんだけど、逆に言えば、『そこさえ警戒すれば後は楽勝だ』って思ってるような節があるんだよね」

「そう、なのか…………？」

「慎重さだけなら、何も『隠す』だけには留まらないはずだと思うよ。嘘を織り交ぜることだってできるはずなんだ。なのにそれをしない。隠すだけで隠し通せるっていう自信の表れだね。それと、情報を得る事に関しても自信があると見た。その悪人を裁くべきかどうか決める——いわば裁判できる立場にいる。そういう自信があるから、堂々と隠れてるんだよ。そうなると警察や弁護士、検察、もしくは諜報員の類かな」

「一般人がキラなら『裁判』はしない？」

「個人の裁量で裁けばそれでいいキラが、そこにわざわざ『裁判』を入れるんだよ？ キラを縛って、かつ縛られる事で自己満足を満たすも

のがあるって考えた方が納得できる」

「ランスは内心、舌を巻いた。」

一見手掛かりを残していないキラの手口から、単独でここまでプロファイリングを進めている。この発想と立場の自由度ならば、ライがキラを追い詰める日はそう遠くないかもしれない。

〈他のノート所有者については、どうだ〉

ランスは好奇心を煽られて聞いた。キラからこれだけの情報を得たライの事だ。以前話した死神たちの情報から、キラの活動を起点に推理しているかもしれない。

「んー……仮にチコっていう死神がキラにノートを託してるなら、ノートはもう一冊警察にあるかもしれない」

〈ほう？〉

「グドかヒウが警察にノートを落としたのを見越して、敢えてどちらかがもう一方に接触できる状況にしたんじゃないかな？」

やりかねない、とランスは思う。そして、ランスから聞いた情報だけでそこまで考えるライの発想に慄く。

まるで千里眼だ。

「けど、グドかヒウが警察のキラにノートを落としたとしたら読みにくくなるかなー。また第二のキラ——というか、第二の『第二のキラ』が出てくるのを期待しないといけなくなる。いずれにせよキラに憑いてる死神は、キラを起爆剤にして所有者に揺さぶりをかけてきてると見て間違いないでしょ。どうせランスだって、誰かがキラになりうる人間にノートを渡すと見越して、キラを見つけられそうなオレに目をつけたんだろうし」

死神たちの思惑から逆算し、ライはこのノート争奪戦の全体像を掴んでいる。

「——ランス」

〈何だ〉

「答えたくないなら答えなくていいんだけどさ。オレの前にも誰かにノート渡したりした？」

〈と、言うって？〉

「何人かにノートを渡して、能力テストしたりしたのかなーって。フランスの事だから、多分それで失格になった人間は殺したと思うけど」
「へいや、お前が第一号だ」
「そっか」

「それがどうした？」

「フランスが、オレが使い物にならないと判断したらオレを殺して、オレが言った事とノートを次の玩具に引き継ぐっていう確証を得ようと思っただけど、前例がないなら判断できないな。仕方ない。殺されないように頑張らないと！」

ライの言葉に、フランスは何も言わずそっぽを向いた。

この子供を相手に何かを隠す事で、これほどまでに不気味さを感じるとは思いもしなかった。

⑦

風見龍兵^{かざみりゅうへい}。46歳。身長179センチ。

1月30日。

「――新しいキラ、か」

〈派手に動き出したらしいな……貴様はどうする?〉

「無論、回収する。この手でノートを管理し、隠匿する。利害は一致するからな」

〈眼の取引は?〉

「せんよ。せずに済むならばそれに越した事はない」

〈なるほど、ではノートを集める手立ては?〉

「簡単だ。ノートとは別の力を使う……権力^ちや財力^かとは、使う物だ。まず洗うべきは警察だな。キラが動き出したなら、捜査本部が設置されるだろう」

風見はスマートホンを手に取り、連絡をつけた。相手は政府高官で、警察にも伝手を持っている男だ。

「それにしてもヒウ……他の5冊のデスノートと5人の死神の居所について心当たりはないのか」

〈ねえよ。日本に集まる可能性が高いとは思うが、全員集まると断言はできねえ。ノートの集め方や所有者の選び方は死神によって違えからな。ノートを集められるだけの能力がある奴に預けるのは確かだが〉

「何故死神自身がノートを地に落とし、死神同士で管理しない? 人間界に落とすのはまだしも、人間の手を介する必要があるのか?」

〈1つには、誰が裏切るかもわからねえって理由があるな。それと、やっぱ人間界の事は人間にやらせた方が良いだろうってハナシだ〉

「死神も一枚岩ではない、か。神を名乗る割には随分と謙虚な自己申請だ」

〈へっ……マフィアには言われたくねえよ〉

「強いてカテゴリーズされるならそこに振り分けられるのは認める

が、生憎俺にも筋と道理はある。お前もそれを知っているから、俺にノートを渡したのだろう」

「ああ、貴様は御誂え向きの人材だよ。風見」

返信があるまで本業を片付けながら、風見はいくつものメールアドレスやスマートホン、携帯電話を使って連絡を取る。

「へっへっ、千切ったページはどう使うんだ？」

「実験と目眩しと、仕事の一環だ。殺しが必要なら撒いたページにメモを加え、それが殺人に繋がると本人にも悟らせないように名前を書かせる。幸いこの業界には、電子媒体でない方が都合の良いケースもあるからな。不自然ではない」

「へっへっ……自分では名前を書かないんだな」

「当然だ。折角所有権を破棄したのだから、手間を増やすつもりもない」

風見龍兵は、俗に言う裏社会を牛耳る男だ。自分の影響力の及ぶ地域で薬物取引などを管理し、そこから漏れた者は現地警察との繋がりに使って取り締まる。そういう陰の権力を持っている。広範に渡る情報収集力と支配力は、ノート争奪戦においては一定のアドバンテージを發揮するだろう。

二重三重の隠蔽によって風見龍兵という男の名前や風貌、それどころか存在を知る者はかず少ない。だからこそ、ヒウは風見をノート所有者に選んだのだ。